Kīma āli—エマル市の慣習法について—*Kīma āli*: On the Customary Law of Emar

山 田 雅 道^{*}
YAMADA Masamichi

ABSTRACT In this study, the present writer will argue that the customary law was actively functioning in Late Bronze Emar, covering many fields of the city life with explicit details.

In the Akkadian texts from Emar, occasionally we find the phrase *kīma āli*, meaning “according to (the custom of) the city (i. e., Emar).” It occurs once in a contract on a loan of silver and in other eleven texts concerning the inheritance of family property. In the former text (*ASJ* 13-T 34), it is prescribed only that the debtor “will add the interest *kīma āli*” (l. 3), while the rate and the term for repayment are not mentioned. This means that the reference to *kīma āli* was thought enough to indicate these concrete conditions. Similarly, in most of the latter texts it is just prescribed that the property is to be divided by the inheritors *kīma āli*. However, four of these texts (*Emar* VI 177; *ASJ* 13-T 23; *RE* 8, 30), which also include lists detailing how to divide the main property, are noteworthy. Since these dividing lists all seem to follow a pattern in which the eldest son acquires more than his brothers as well as the main house, we may conclude that such a way of inheritance was customary in Emar.

Although without referring to *kīma āli*, the customary law of Emar appears to be concerned in other two texts, too. In *RE* 61 on the marriage (and divorce) of two Emariote women, we find *kīma mārāt Emar*^{kl}, “according to (the custom of) the daughters of Emar” (l. 11; cf. also ll. 17b-18a, 21). This suggests that there were customary laws for female citizens of Emar, protecting their rights (cf. ll. 18b-22 in the case of divorce). *Emar* VI 18 deals with the enslavement of a certain Kittā, an Emariote serving the king of Carchemish. When he was

* 日本オリエント学会会員

Member, The Society for Near Eastern Studies in Japan

enslaved (probably because of debt) by Hešmi-Tešub, prince of Carchemish, his family was also about to be enslaved following the Hittite manner. However, it ended up with only Kitta's becoming a slave according to the *māmītu ša* ^{𒀭𒊕} *Emar*, "the 'oath of Emar" (ll. 11b-12a), probably a treaty between the Hittites and the Emariotes. Based on this, we may assume that this treaty accepted the non-Hittite customary law of Emar in the case of enslavement (of debtors). This aspect of the Hittite administration of Emar can also be seen in the other Syro-Hittite type texts in which *kīma āli* is mentioned (especially royal documents of Carchemish such as *Emar* VI 201), showing that the Hittites respected the customary law of Emar.

はじめに

エマル文書 (前13-12世紀初期シリア)⁽¹⁾ には、しばしば *kīma āli* (直訳「市のように」) という表現が認められる。「慣習」という語を欠くものの、この表現はメソポタミアの文書にも散見され、「市(の慣習)に従って」という意味で用いられた。例えばシュメール語・アッカド語の辞書 *ḪAR.ra-ḫubullu* (i 65行) には *māš.uru.gim=šīb-tum ki-ma a-lu* 「市(の慣習)による利息」(*MSL* V, p.14; cf. *Emar* VI 541: 66) という記載が見られるほか、実際に古巴ビロニア時代の書簡 *PBS* VII 84 では、受信者の手元にある大麦から *ki-ma a-lim* 「(彼がいる)市(の慣習)に従って」(19行) 費用を差し引くべしとの命令が下されている。⁽²⁾

おそらく *kīma āli* とは *kīma paraš āli* の略記であろう。このことは、アラハ文書 *AT* 17 (前15世紀) から示唆される。この文書によると、ルバ市の人 Šatuwa が Apra の娘を嫁 (*kallatu*) として求めた際、前者は後者に *ki-ma pa-ra-aš URU.ḫa-la-ab. KI* 「アレppo市の慣習に従って」(5行) 贈答品を贈ったという。ここではルバ市とアレppo市の間にあった慣習法上の相違が前提とされており、文脈的にも興味深い事例である。

本稿では、この *kīma āli* という表現を出発点として、エマル市の慣習法に関する検討を試みる。エマルにおいて慣習法は、いかなる生活分野において機能していたのであろうか。資料と紙幅の制約上、全ての慣習法の内容を明らかにすることはもとより困難であるが、以下の議論を通して、今後エマル社会を研

究していく上での指針を探りたい。

I. エマル市の慣習法: *kīma āli*

当時エマルは、属国としてヒッタイト——実質的には、その配下においてシリア方面を管轄していたカルケミシュ——の支配下におかれていた。こうした歴史的状况を反映して、エマル文書には2種類の文書(粘土板)形式が知られている。すなわちシリア型とシリア・ヒッタイト型であり、両者は字体・正書法・言語的に異なった特徴を示す。一般に前者はエマル在来の書記伝統を反映するのに対し、後者にはヒッタイトとの関係が指摘⁽³⁾されている。以下のリストは、*kīma āli* の用例を文書形式と書記伝統の点に即して整理したものである(R/Eはエマルの、R/Cはカルケミシュの王室文書)。

シリア型 (Syrian type) :

Emar VI 184: 11'(R/E?); *ASJ* 13-T 23: 23; 34: 3; *RE* 8: 38(R/E); 28: 33(R/E); 30: 22(R/E); 69: 21

シリア・ヒッタイト型 (Syro-Hittite type):

Emar VI 112: 10; 177: 27'(R/C); 201: 50(R/C); 203: 4'(R/C?); *TSABR*
⁽⁴⁾
46: 9

このようにエマル文書において *kīma āli* という表現は双方の形式の文書に見られるのであるが、表記に注目すると、一般的にシリア型文書では *ki-(i-)ma* URU.KI, シリア・ヒッタイト型文書では *ki-(i-)ma* URU-*li*⁽⁵⁾ と書かれる傾向にあったことが指摘できる。

文書内容の分野別では偏差が認められる。全12例中、*kīma āli* が用いられるのは、債務に関する1例を除き、全て財産相続に関連した文脈である。まず前者の例を見てみよう。

ASJ 13-T 34 には以下の債務契約が認められる。

- (1) 1/3 'MA¹.NA KÙ.BABBAR *šār-pu* (2) 'NA₄ URU¹.*e-mar*.KI¹ (3) *kī-ma* U[R]U 'MÁŠ *ūl-ša-ab* (4) KI¹ *ia-ah-ši-a*¹EN (5) DUMU 'im-li-ki¹ (6) ^mfaUTU¹-a-*'bu*¹ (7) DUMU *mil'-ki-a*^d[*a-gan*] (8) 'ŠU¹.BA.

「AN」.TI

エマル市の分銅(で計量した)1/3ミナの精錬された銀(に関して)。市(の慣習)に従って利息を加える。Imliki の息子 Yaḥṣi-bēlu から Milki-D[agan] の息子 Šamaš-abu が(それを)借りた。

残念ながら、この文書には利率・返済期限その他の情報が欠如している。⁽⁶⁾にもかかわらず当事者達が了解し、契約文書として成立している点は重要である。この事実、ここで *kīma āli* という表現が明確な具体性を備えた慣習法に言及していることを示す。

財産相続の分野の文書では、いずれも相続者達が財産を *kīma āli (itti aḥāmiš) zāzu*「市(の慣習)に従って(互いに)分ける」という定形句の中で *kīma āli* が用いられている。動詞の形は RE 69: 21 の present 形「分ける」を除き、全て precative 形「分けるべし」である。

一例を挙げよう。Emar VI 201 は卜占師 (*bārū*) Zū-Ba⁽⁷⁾la の財産所有・相続をカルケミシュ王 Ini-Tešub が確認した文書であるが、そこでは Zū-Ba la から息子達への財産相続が以下のように規定されている。

(40) *ū a-nu-um-ma DUMU.MEŠ* ^f*q*KUR-la-a-i Ê-ia (50) *mim-mu-ia ki-i-ma URU-lī li-zu-zu* ^m*d*IM-UR.SAG DUMU-ia GAL (51) DINGIR-lī Ê-ti GAL

今、(私の妻) Dagan-lā'i の息子達は、私の家、私の財産を市(の慣習)に従って分けるべし。⁽⁸⁾*d*IM-UR.SAG は私の長子であり、神(像)は本宅(に属す)。

彼の財産は、エマル市の慣習法に従って分割相続される。ここで注目されるのは「長子」の任命や神(像)が帰される「本宅」に関する規定 (50b-51行) である。これらは財産相続の際に何らかの差別化がはかられたことを示唆するが、果たしてそれは慣習法の一部を成していたのであろうか。

「長子」と「本宅」に関し、今回扱う11点の文書を比較してみたのが以下の対照表である。ここから明らかなように、これらの要素は常に記事に現れるわけではない。

対照表：「長子」と「本宅」

略号：A = DUMU-*ia* GAL(-*bi*); B = É(-*tu*₄)GAL; C = DINGIR-*li*(*ša*) É(-*ti*) GAL

(B に関する注：C 以外に É(-*tu*₄/*ti*)GAL への言及がなければ (+), あれば+)

文 書	A	B	C	備 考
<i>Emar</i> VI 112	—	—	—	
<i>Emar</i> VI 177	+	+	+	財産分割リスト
<i>Emar</i> VI 184	—	(+)	+	テキスト破損
<i>Emar</i> VI 201	+	(+)	+	
<i>Emar</i> VI 203	—	(+)	+	テキスト破損
<i>ASJ</i> 13-T 23	—	—	—	財産分割リスト
<i>RE</i> 8	+	+	+	財産分割リスト
<i>RE</i> 28	+	(+)	+	
<i>RE</i> 30	—	+	—	財産分割リスト
<i>RE</i> 69	—	+	—	
<i>TSABR</i> 46	—	(+)	+	

さらにエマル文書においては、財産相続の際に長子が優遇される例がしばしば認められる一方、財産の平等分割を示す例が散見されることもまた事実である。例えば *RA* 77-T 1 には、遺言者たる父が相続者に任命した娘 Unara の死後、彼女を母として世話する義務を負った彼の 3 人の息子達（「長子」Adda を含む）が、その財産を *a-ḫu ki-ma a-ḫi li-zu-zu*「平等に分けるべし」（31行）とした規定が見える。また *Emar* VI 93 には、母 Arnabu の死後、彼女の世話をしていた 2 人の息子達に関し、その財産を *it-ti a-ḫa-miš li-iz-zu-zu GAL ū TUR i-na ŠĀ-šū-nu i-ia-nu*「互いに分けるべし。彼らの間に年長・年少（の区別）はない」（8 行）と定められている。これらの例は、エマルにおいてたしかに財産の平等分割が行われた場合があったことを示す。

以上の点を認めた上で、再び Zū-Ba^ala の財産相続の問題（*Emar* VI 201）に帰ろう。同じ財産相続に関する記事は *Emar* VI 203 にも認められる。テキストが破損しているものの、以下のように読める。

(3') ū *a-nu-ma* 5 DUMU.MEŠ ^fr^aKUR^l[*la-i É-ia mim-mu-ia*] (4')
ki-ma URU-li li-zu-zu DINGIR-l[*li É-ti GAL*]

今, Dagan-[lā'i] の 5 人の息子達は, [私の家, 私の財産を] 市(の慣習)に従って分けるべし。神(像)は[本宅に属す]。

ここでは Zū-Ba'la の長子 ʔIM-UR.SAG への言及が欠けている点が注目される (Emar VI 201: 50 参照)。この事実は、長子が任命された場合でも、常に文書に記されたわけではないことを示す。さらに、その ʔIM-UR.SAG の遺言書たる SMEA 30-T 7 は興味深い。彼の妻の死後、5 人の息子達が財産を相続する場合の規定は以下の通りである。

(13) *û a-nu-ma* ^{md}30-*a-bu-ma* DUMU-*ia* GAL (14) *û ki-i ŠEŠ*.GAL ḪA.LA *i-laq-qu-û* (15) *û* ^{md}30-*a-bu a-kân-na-ma' lîl-qê* / (16) 'û' *šum-ma* ^{md}30-*a-bu* BA.ÚŠ (17) *û i-na ŠĀ* DUMU.MEŠ-*ia* GAL *û TUR ia-nu* (18) *û šum-ma* ^{md}30-*a-bu* BA.ÚŠ *û* ^{md}IM-*ma-lik* (19) LÚ.ḪIAL *ša* DINGIR.MEŠ *šu-û-ut*

今, ʔ30-abu は私の長子である。長兄が相続分を取るように, ʔ30-abu はそのように(相続分を)取るべし。/ もし ʔ30-abu が死んだならば, 私の息子達の間に年長・年少(の区別)はない。もし ʔ30-abu が死んだならば, (別の息子)ʔIM-malik が(エマル市の)神々のト占師である。

ここでは以下の 3 点が注目される。第一に「(エマル市の)神々のト占師」という官職は、長子によって相続されるべきこと。⁽¹⁰⁾第二に財産の平等分割は、長子が死亡した場合の例外的措置であること。第三に「長兄が相続分を取るように」(14行)とあるように、財産相続の際、長子に対する優遇措置が一般原則として前提とされていること。このように SMEA 30-T 7 は, *kîma āli* への言及を欠くとはいえ、特別な権利をもつ「長子」の存在を強く示唆する。

実際、エマル社会における長子の特権に関しては、既に指摘のあるところである。すなわち財産相続に際し、長子は本宅を含め、他の息子より多くの相続分を受け取ること、⁽¹¹⁾そして家の神々と祖先の霊を礼拝することである。⁽¹²⁾たしかに *kîma āli* に言及する文書には財産を平等分割する例は皆無であるし、財産相続関連の文書を読めば、これらの特徴が多くの場合に妥当することも事実である。しかし、事例の多さが即エマル市の慣習法を反映していることの証拠と

なるわけではない。

そこで筆者が注目したいのは、*kīma āli zāzu* に言及し、しかも主要な財産の分割状況がリストとして示されている以下の4点の文書である。ここで *ASJ* 13-T 23 を除き、「市(の慣習)に従って分ける」とされるのが、リストに列举された以外の財産であるという点には注意を要する。しかし、この点を認めた上でなお、もしこれらのリストに一定の分割パターンが認められるならば、それはエマル市の慣習法を反映した結果であると見なしてよいのではないだろうか。

財産分割リスト

(注：各種家屋が知られているが、ここでは単に家屋として一括する)

(1) *Emar* VI 177: 23'-25'

PN₁ (長子)－家屋 1 軒 (本宅)；PN₂－家屋 1 軒；[†]PN₃－家屋 1 軒

(2) *ASJ* 13-T 23: 24b-30a

PN₁－家屋 2 軒；PN₂－家屋 1 軒；PN₃－家屋 1 軒；[†]PN₄家屋 1 軒

(3) *RE* 8: 19-34

PN₁ (長子)－家屋 4 軒 (本宅を含む)，隷属者 6 人，車両 2 台；

PN₂－家屋 2 軒，隷属者 4 人

(4) *RE* 30: 8-19⁽¹³⁾

PN₁ (養子)－家屋 1 軒，耕地25シッドゥ；

PN₂ (実子⁽¹⁴⁾?)－家屋 3 軒(以上?) (本宅を含む)，耕地55シッドゥ

財産の分割結果には明らかに差異が認められる。量的には (2)－(4) が、質的には「長子」と「本宅」の結びつきという点で (1) と (3) が注目される。ここから示唆されるのは、長子優遇を原則とした財産分割であろう。この場合、長子への言及を欠く (2) では PN₁ を、(4) では PN₂ を、それぞれ長子と見なすことができる。

以上から、エマル市の慣習法は、財産相続において長子への優遇を原則としていたと結論できよう。その分量を正確に算出することはできないものの、長子はその弟達に比べ多くの相続分を取り、本宅を相続すべき存在であった。

II. エマル市の娘達 : *kīma mārāt Emar*^{ki}

エマル市の慣習法に関しては、以上の他にも参考となる資料が存在する。最近出版された *RE 61* はその好例である。ここには「エマル市の娘(達)」⁽¹⁵⁾、すなわち外来者でも奴隷でもないエマル市の女性(市民)に関する記述を認めることができる。

この文書によると Dagan-milki なる女性は、娘 Aḫlamītu を Aḫī-ḫamīs に妻として与えた (3-6a行)。これに対し、Aḫī-ḫamīs の方からも娘が彼女に与えられた。

a-nu-um-ma ^{<m>} *a-ʿhi-ḥa-miʿ-lis* (7) DUMU. EN-*lu-ka* DUMU. MÍ-*šu*
^f *na-aḥ-mi*-KUR (8) ^f *aʿ-na* ^d *da-gan-mi-il-ki* (9) DUMU. MÍ ^d *da-gan-*
ta-ri-ilḫ (10) *a-na* É.GI.A *u* DUMU. MÍ-*ti* (11) *ki-ma* DUMU. MÍ. MEŠ
e-ʿmar-l. KI (12) *id-di-in-ši*

今、Belu-ka の息子 Aḥi-ḥamis は、彼の娘 Naḥmī-šada を Dagan-tariḥ の娘 Dagan-milki に嫁および娘として、エマル市の娘達(に関する慣習)に従って、与えた。

以下、Ri . . . の息子 Yaḥanni-ili⁽¹⁶⁾ が Nahmī-šada をめとった場合の措置が続く (12b-18a 行)。残念ながらこの部分はテキストが破損しており、文意不明であるが、その措置に関し、⁽¹⁷⁾「*ki¹-ma* *ʾDUMU*.*MÍ URU.KI e-mar.KI ší-it*「彼女はエマル市の娘であるから」 (17b-18a 行) との説明が付されている。さらに記事は続く。

šum-m[a] (19) ^m*a-ḫi-ḫa-mi-is* DUMU EN-*l[u-ka]* (20) ^r*aḫ-la-mi-ta*
 DAM-*š[u]* (21) *iz-zi-ib-ši ki-ma* DUMU.Í ^r*e-mar*.KI (22) *ši-it iz-*
zi-ib-ši

もし Bēl[u-ka]の息子 Aḥi-ḥamis が彼の妻 Aḥlamitu を離縁するならば、
彼女はエマル市の娘であるから、(それにふさわしい仕方)で彼女を離縁する。

ここで Ahi-ḥamiš の娘 Naḥmi-šada と Dagan-milki の娘 Aḥlamitu の双方がエマル人であったことは明らかである。というのは、両者——前者の結婚

(6b-18a行)と後者の離婚(18b-22行)——に関する記事中に *kīma mārāt Emar^{ki}* (11行) や *kīma mārāt (ā^{ki}) Emar^{ki} šit* (17b-18a, 21行) という表現が認められるからである。異なる訳を付したものの、これらの表現の背後にあるものは、同じくエマル市の女性に関する慣習法であると考えられる。すなわち彼女達が結婚ないし離婚する場合に、慣習法に従って「しかるべく」行われなければならないことを、それらは示している。

エマル市が家・男性中心的な社会であったことは疑いえない。女性に関する慣習法があるならば、男性に関するそれもまた存在していたであろう。しかし RE 61 が重要と思われるのは、むしろそうした社会にあって、なお女性の身分や権利への配慮が認められる点にある。先に引用した Aḥlamītu の離婚に関する規定 (18b-22行) は、そのことを示す。Aḥī-ḥamis が彼女を離縁する場合、彼は何らかの法的規制を免れないのである。

以上の議論は、エマル社会における女性研究にも影響を及ぼさずにはいない。⁽¹⁸⁾ 例えばエマル文書には、財産相続の際、適当な男性相続者（息子）がいなかった場合に、女性（多くは娘）を「女性および男性」ないし「男性および女性」として相続者に任命する例が散見される。⁽¹⁹⁾ これらが例外的な措置であったことは明らかであるが、このような事例をどう評価したらよいであろうか。あくまで突発的・緊急避難的な措置として慣習法の枠外で扱うか、あるいはこうした事例も慣習法の枠内にあった選択肢の一つと見なすかという問題である。この点に関し、RE 61 は後者の可能性を支持する根拠となろう。男性に対し劣位にありながらも、なお自らの権利を有していた存在として、エマル市の女性を捉え直していく必要がある。

III. エマル市の誓約: *māmītu ša^{uru} Emar*

エマルがヒッタイトの支配下にあれば、異なった社会・文化的伝統をもつ両者の間に摩擦が生じたであろうことは、容易に予想される。この点に関して興味深いのは Emar VI 18 である。⁽²⁰⁾ この文書によるとカルケミシュ王 Ini-Tešub の弟 Hešmi-Tešub は、王の許可を得て Kitta を奴隷とした際、「ヒッタイト式に⁽²¹⁾」彼の家族をもそれに含めた (1-6行)。しかし Kitta とその父の抗議を受けて (7-10a行)、王は新たな決定を下す。

û LUGAL a-na ^mhe-eš-mi-^aU-ub (11) a-kân-na iq-bi ma-a at-ta ma-mi-ta (12) ša URU.e-mar ú-ul te-de-e um-ma LUGAL (13) ma-a ^mki-ta-ma ĪR-ka û a-na muḥ-ḥi a-bi-šu (14) É-šu DUMU.MEŠ-šu la-a ta-qar-ri-ib

そこで王は Hešmi-Tešub に以下のように言った、「お前は『エマル市の誓約』を知らないのか」と。王は(言った)、「Kitta はお前の奴隷である。しかし彼の父、彼の家、彼の息子達に近づいてはならない」と。

ここで「エマル市の誓約」(11b-12a行)とは、ヒッタイト人とエマル人の間に結ばれた条約を意味する。この条約に従って下された王の決定は、さらに以下の部分で具体的に述べられている。すなわち Kitta は生涯 Hešmi-Tešub の奴隷であるのに対し、彼の息子達は彼の父の家を継ぎ、王(すなわち Ini-Tešub)のために GIŠ.TUKUL-義務を果たすということである(14b-20行)。

ここからは Kitta に関し、以下の3点を指摘することができる。第一にその家族が「エマル市の誓約」によって保護され、奴隷化を免れたという事実から判断して、Kitta がエマル人であったことは確実である。第二に14b-20行からは、彼とその父がカルケミシュ王の臣下であったことが理解される。第三にそのような人物が新たに奴隷となる場合、最も可能性が高いのは債務奴隷のそれである(Kitta は戦争捕虜でも購入奴隷でもなかった)。

Kitta はエマル人であると同時に、カルケミシュ王の臣下であった。おそらく「エマル市の誓約」には、ヒッタイト人がエマル人を(債務)奴隷とする場合、その家族は除外されるというような条項が含まれていたであろう。彼の「エマル人」としての地位が家族を救ったのである。ならば他方、Kitta に対する最初の奴隷化の背後に、同じく彼の「カルケミシュ王の臣下」としての地位があったとしても不思議ではない。彼はヒッタイト人とも見なされていたが故に、その奴隷化に際しては実際に「ヒッタイト式に(?)」(6行)家族を巻き込んでしまったのではないだろうか。

この点に関しては、残念ながらヒッタイト法典に(債務)奴隷化の規定がなく、これを証明できない。しかし、この問題を考える上でウガリト文書 RS 17.130 (PRU IV, pp.103-105) はきわめて示唆的である。これはウガリトにおけるウラ市(アナトリア南岸)の商人の活動に関し、ヒッタイト王 Ḫattušili 3世が

ウガリト王 Niqmepa に与えた法令である。この中には債務奴隷化に関し、以下の規定が含まれている。

(25) *ù šum-ma KÙ.BABBAR.MEŠ ša DUMU.MEŠ URU.ú-ra* (26) *it-ti DUMU.MEŠ URU.ú-ga-ri-it* (27) *ù a-na šu-lu-mi-šu la-a i-le-ú*
(28) *ù LUGAL KUR ú-ga-ri-it LÚ-li ša-a-šu* (29) *qa-du DAM-šu qa-du*
「DUMU」.MEŠ-šu (30) *i-na ŠU-ti DUMU.「MEŠ」 URU.ú-ra* (31) *LÚ.MEŠ. DAM.GÀR i-na-an-di-nu-šu-nu-ti*

もしウラ市の人々の銀がウガリト市の人々のもとにあり、彼らがそれを返済できないならば、ウガリト国の王は、その者を彼の妻子と共に、商人であるウラ市の人々の手に渡す。

すなわち、ウガリト人がウラ市の商人に対して負っていた債務を返済できない場合、債務者本人ばかりか妻子までもが自動的に債務奴隷とされるのである。これは *Emar VI 18* における最初の奴隷化と同様の状況であろう。これら2点の文書の背後には、(債務)奴隷化に関して同じヒッタイト的な制度（あるいはヒッタイトがその属国において採用しえた政策）の存在が想定されるのである。

家族を自動的に伴う形の(債務)奴隷化がヒッタイト的な制度であったとするならば、それを禁じた「エマル市の誓約」の規定はどう評価されるであろうか。条約である以上、エマルに対するヒッタイトの統治政策を反映している点は勿論であるが、問題はこの規定の基礎に何があるかということである。エマルにおいて非ヒッタイトの場合、考えられるのはやはりエマル市の慣習法であろう。この点について最後に触れておきたい。

エマルでは、債務者が債務を返済できず債権者（あるいは第三者）の隷属者となる場合、その地位は *ÌR/ardu*「奴隷」と *LÚ.Ú.LU/amīlu* の2種類に分類⁽²⁴⁾される。こうした選択性をまず確認した上で、さらに債務奴隷化の事例を見ると、債務者の家族を伴う場合（例：*Emar VI 215*）が認められる一方、債務者本人のみの場合（例：*Emar VI 121*）や債務者の代わりに妻が奴隷となる場合（例：*TSABR 26*）もまた同様に見られる。債務額や契約条件によって対応が様々であったことが窺われるのである。

エマルにおける隷属者の問題はさらなる検討を要するとはいえ、以上の簡単

な観察からだけでも、上記したヒッタイト的な制度との相違が理解されよう。

「エマル市の誓約」という条約において常に期待されることではないが、*Emar* VI 18 で問題となった(債務)奴隷化の規定に関しては、エマル市の慣習法が優先されたと考えられる。

おわりに

以上に論じたように、*kīma āli*「市(の慣習)に従って」という表現には、具体的な内実を伴って機能していたエマル市の慣習法が反映されている。その他の表現による場合も含め、こうした慣習法は、債務、財産相続、女性(結婚と離婚)、(債務)奴隷化と、広範な生活分野におよんでいた。本稿を閉じるにあたり、さらに以下の2点を指摘しておきたい。

第一にヒッタイト支配との関係についてである。ヒッタイト人はエマル既存の政治・社会制度に対する配慮を示していたことが既に指摘されている。例えば *Emar* VI 194 からは、エマル市における二つの公権力——王宮と市当局(後者は市神ニヌルタと市の長老会の連合体)——の存在をカルケミシュ王がよく認識していたことが窺われるし、上記したように *Emar* VI 18 からは、⁽²⁵⁾ヒッタイトとは異なるエマル市の慣習法への配慮を読みとることができる。支配のこうした一面に関し、シリア・ヒッタイト型文書における *kīma āli* の用例は、さらなる補強材料となろう。すなわち、この表現が(*Emar* VI 201 などの王室文書を含む)この種の文書にも用いられているという事実には、同様の態度が反映されているのである。

第二にエマルにおける社会制度の研究についてである。市の慣習法が具体的な内実を備えていた点を考慮すると、今後この分野の研究を行うに際しては、しばしば見られるような事例のパターン分類にとどまらず、さらに基本的な原則は何かを問う姿勢が求められるのである。また、*kīma mārāt Emar^{kl}*「エマル市の娘達(の慣習)に従って」という表現は、何も結婚・離婚といった分野に限定されるわけではあるまい。他の分野の研究においても、女性に関する慣習法の存在を念頭に置く必要があると思われる。

Appendix：エマル文書における *kī mašimē*

上記注 4 で指摘したように、*Emar* VI 29: 9 と *GsK*-T 2: 7 には *kīma āli* ではなく *kī mašimē* 「いくつであれ (全て), 何人であれ (全員)」という表現が用いられていると考えられる。ただし *GsK*-T 2 に関しては、付された写真 (*GsK*, pl.III) が不鮮明なため、テキストを確認することができない (コレイションが必要)。しかし、*RE* 56: 15 と *TSABR* 43: 7b-8a に *kī mašimē* を伴う並行句が認められること (下記参照) から、その可能性はきわめて高いと思われる。

筆者の調査によると、エマル文書で *kī mašimē* が現れるのは以下の 5 箇所。文書は全てシリア・ヒッタイト型であり、いずれも生まれてくる子供達に関する文脈で用いられている。

Emar VI 29 (cf. Arnaud, *Emar* VI/3, p.39)

(9) *ki-i ma-l-ši-me-e* DUMU.MEŠ *ša⁽²⁶⁾ra^m* [20-GAL (. . .)] (10) *it-ti a-ḥa-miš li-zu-[zu]*

^a[20-GAL] の息子達が何人であれ, (彼ら全員が)互いに(財産を)分け[る]べし。

PdA 67 (cf. Fales, *PdA*, p.205)

(9) *ū ki-i ma-ši-me-e* DUMU.MEŠ-*n*[*i* (. . .) *É²-ia²*] (10) *it-ti a-ḥa-mi-iš li-zu-zu*

私⁽²⁷⁾[達]の息子達が何人であれ, (彼ら全員が)互いに[私の家を(?)]分けるべし。

GsK-T 2 (cf. Sigrist, *GsK*, p.169)

i-na EGIR u₄-mi ki-i ma-ši-me-e (8) DUMU.MEŠ DUMU.MÍ.MEŠ *m²zu-aš-tar-ti ul-la-ad . . .*

将来, Zū-Aštarti が息子達・娘達を何人もうけようとも, (彼の息子達は王の家臣としてとどまり, 彼の娘達は Zū-Aštarti が嫁がせて彼女達の花嫁料を取るべし。)

RE 56 (cf. Beckman, *RE*, p.74)

(14) *ra-nu¹-ma m²di-me-e*[*t x*] *x-ia* (15) *ki-ri¹ ma-ši-me-e* [DUMU.MES] *ū-la-ad* (16) *ša gāb-bi* DUMU.MEŠ-*ri^a?* *šu²?*-*nu*

今, 私の . . . Dime[*t* . . .]に関して, 彼が[息子達]を何人もうけようとも, 彼ら(全員)は私の息子達全員のものである(?)

TSABR 43 (cf. Arnaud, *TSABR*, p.81)

ū ki ma-ši-[m]ē-e (8) DAM-*ti-i*[*a* DUMU].MEŠ-*ši* *ū.TU it-ti a-ri¹ha¹-miš* (9) *li-iz-zu-zu*[*u* . . .]

私[の]妻が[息子]達を何人もうけようとも, (彼ら全員が)互いに(財産を)分け[る]べし。

注

- (1) 本稿で用いるエマル文書の略号については、拙稿「エマル文書の年代学序説——絶対年代と対照年代」『オリエント』第37巻第1号(1994), p.28, nn.1-2を見よ。なお、以下の略号を追加する。*RE* = G. Beckman, *Texts from the Vicinity of Emar in the Collection of Jonathan Rosen* (HANE/M II), Padova, 1996; *SMEA* 30-T=D. Arnaud, "Tablettes de genres divers du moyen-Euphrate," *SMEA* 30 (1992), pp.195-245.
- (2) その他の用例を含め、*CAD* および *AHw* の *ālu(m)* と *kīma* の項目を参照。
- (3) 池田潤「エマルにおけるスクライバル・トラディション」『オリエント』第39巻第2号(1996), pp.1-15 参照(先行研究を含む)。
- (4) Beckman は *RE* 88: 3' の破損箇所にもこの表現を復元する(*RE*, p.111)。この他 *ki-i-ma URU-lī-e* と翻字された事例(*Emar* VI 29: 9; *GsK-T* 2: 7)が存するが、このリストからは除外した。*/āli/* を *URU-lī-e* と綴るのは異常であり、むしろ *ki-i-ma-ši-me-e* と読むべきであろう(下記 Appendix を見よ)。なお、*Emar* VI 201 (カルケミシュの王室文書)は文書形式的にはシリア型に属すが、内容と書記伝統の点でシリア・ヒッタイト型に分類される。
- (5) 破損した文書を除き、この原則に反するのは *TSABR* 46: 9 である。また *ASJ* 13-T 34: 3 も例外に属する(下記参照)。
- (6) エマル市における標準利率その他は不明である。この点について、小野哲「エマル出土の貸借契約関連文書」『オリエント』第39巻第2号(1996), pp.103-104を見よ。
- (7) *Zū-Ba'la* はエマルの高級神官であった(下記注10参照)と同時に、ヒッタイト人と密接な関係を保っていたことが知られている。彼とその家系に関しては、拙稿 "The Family of *Zū-Ba'la* the Diviner and the Hittites," in: *Fs. Rainey* (in press) を見よ。また前掲拙稿『オリエント』第37巻第1号, pp.26-27, 34 も参照。
- (8) 以下, *māru rabû* (直訳「大きな息子」)を「長子」と訳す(*CAD* M/1, p.311b [s.v. *māru*, mng.1a4'a'] 参照)。また *bitu rabû* (直訳「大きな家」)は、主要な家屋という意味で「本宅」とした。
- (9) この点に関し、前掲拙稿 *Fs. Rainey* (in press) を見よ。
- (10) *Zū-Ba'la* は「エマル市の神々のト占師」(*Emar* VI 604.4: 2b-3)と呼ばれている。その長子 ⁹IM-UR.SAG がこの職にあったことは、息子への官職相続に触れた *SMEA* 30-T 7 から明らかである(18b-19行参照)。彼の長子 ⁹30-abu がこの官職に任命されていない(13-15行)のは、長子による官職相続が自明の事柄であったからであろう。
- (11) E. W. Davies, "The Inheritance of the First-Born in Israel and the Ancient Near East," *JSS* 38(1993), pp.189-190; G. Beckman, "Family Values on the Middle Euphrates in the Thirteenth Century B.C.E.," in: M. W. Chavalas (ed.), *Emar: The History, Religion, and Culture of a Syrian Town in*

- the Late Bronze Age*, Bethesda, Md., 1996, p.73. なお *Emar* VI 176 によると、長子の相続分はその弟達の 2 倍である (35-36行)。
- (12) この点に関しては, K. van der Toorn, "Gods and Ancestors in Emar and Nuzi," *ZA* 84(1994), pp.38-59; idem, "The Domestic Cult at Emar," *JCS* 47 (1995), pp.35-49; 前掲 Chavalas (ed.), *Emar* 所収の W. T. Pitard, "Care of the Dead at Emar," pp.123-140; B. B. Schmidt, "The Gods and the Dead of the Domestic Cult at Emar: A Reassessment," pp.141-163 を参照。
- (13) Beckman は PN_1 に関する記事においても $\acute{E}$ -[tu_4 GAL] (8 行) と読むが, $\acute{E}$ - tu_4 GAL は PN_2 に属す (15行)。エマル文書では「本宅」が一家に 2 軒ある例は知られていない。
- (14) ただしこの場合, (4) において家の神々と祖先の霊を礼拝するのは、長子ではなく別子 PN_1 ということになる (*RE* 30: 5-7)。
- (15) アッカド語で $m\bar{a}r$ X (国名/市名)「(直訳) X の息子」が「X の男性(国民/市民)」を意味するのと同様に, $m\bar{a}rat$ X「(直訳) X の娘」は「X の女性(国民/市民)」を意味する (*CAD* M/1, p.304b [s.v. $m\bar{a}rtu$, mng.1g] 参照)。
- (16) おそらく Dagan-milki の息子。Ri ... は彼女の亡き夫であろう (Beckman, *RE*, p.80)。
- (17) Beckman (*RE*, pp.79-80) はその措置に該当する箇所を $\acute{u}$ - ul x [...] (17) u - ta^1 - ar - $\acute{s}i$ "he will not [...]" (Rather), he will return her"と理解するが、疑問である。17行の冒頭は実際には UL - AR - $\acute{S}I$ と書かれており、また動詞の D 活用の接頭辞表記に u - は期待しにくいからである (通常は $\acute{u}$ -)。
- (18) Th. Kämmerer, "Zur sozialen Stellung der Frau in *Emār* und *Ekalte* als Witwe und Waise," *UF* 26(1994), pp.169-208 参照。
- (19) その事例に関しては拙稿 "The Hittite Social Concept of 'Free' in the Light of the Emar Texts," *AoF* 22(1995), p.305 & n.37 を見よ (先行研究を含む)。なお以下の事例を追加する: *RE* 15: 11; 23: 14; 85: 14。類似した事例はヌズィ文書にも見られる。
- (20) *Emar* VI 19 をも参照。*Emar* VI 18 (および 19) のテキストに関しては、前掲拙稿 *AoF* 22, pp.307-309 を見よ。
- (21) J.-M. Durand (*RA* 83 [1989], p.176 & n.45) に従って、暫定的に i - na KUR $\acute{h}at$ - $t\acute{i}$ (6 行) を「ヒッタイト式に」と理解する (直訳は勿論「ヒッタイト国で」)。また以下の議論も参照。
- (22) D. Arnaud, "Les Hittites sur le moyen-Euphrate: protecteurs et indigènes," *Hethitica* 8 (1987), p.9.
- (23) ヒッタイトにおける $GI\check{S}$.TUKUL-義務に関しては R. H. Beal, "The $GI\check{S}$ TU-KUL-institution in Second Millennium $\check{H}atti$," *AoF* 15 (1988), pp.269- 305 を見よ。
- (24) 後者 ($am\acute{i}lu$) の直訳は「(自由)人」であるが、ここでは債務を返済できなかった

- ため、その完済まで債権者に仕えた債務者を指す。これら 2 種類の隷属者と以下の記述に関しては、小野『オリエント』第39巻第 2 号, pp.105-110 参照 (先行研究を含む)。
- (25) 拙稿 “Division of a Field and Ninurta’s Seal: An Aspect of the Hittite Administration in Emar,” *UF* 25(1993), pp.453-460 参照。
- (26) *CAD* (M/1, pp. 346b-347[s.v. *maṣṣu*]) は *kī maṣi* を “how much, how many” (mng.1e1’), *kī masimē* を “as much as there is” (mng.1e4’) とする (*AHw*, p.622 a [s.v. *maṣṣu(m)*, G mng.6] も参照)。同様の語形成パターン (疑問詞+*-mē*) は *mannu* 「誰」と *mannummē* 「誰であれ」, *minu* 「何」と *minummē* 「何であれ」の場合にも認められる。
- (27) *Emar* VI 29: 9 と *PdA* 67: 9 に関しては、もしテキストの破損部に動詞 *alādu* 「(子を)産む, もうける」を補うことができるならば、それぞれ 「^a[20-GAL がもうける] 息子達が何人であれ」, 「[私達が] 息子達を何人[もうけようとも]」と理解する (以下の 3 例を参照)。